

大学バスケットボール選手のパフォーマンスと心理的要因の関連性について

Relationship between sport performance and psychological factor in college basketball players

1K06A264

指導教員 主査 倉石平先生

渡邊大樹

副査 内田直先生

【緒言】

学生スポーツにおいてパフォーマンスの発揮との関連要因を明らかにし、それに対する対応策を取ることは非常に重要である。古くから「心・技・体」という言葉が伝えられているように、パフォーマンスの関連要因は先行研究で明らかにされてきた「身体的要因」と「心理的要因」に加え、各競技種目における「技術的要因」が大きくパフォーマンスの発揮に影響を及ぼしていることが考えられる。つまり、優れたパフォーマンスを発揮するにはこれらの3つの要因が絶妙なバランスによって構築される必要がある。どの種目においてもこの3つの要因が高い水準にあることが必要となるわけだが、競技によってはこれらの割合のバランスには差異が生じる。バスケットボールはその競技特性や学生であることから時間的制約を受けるため心理的要因の差が勝敗に大きく関係すると考えられる。

そこでPOMSのT得点を算出し、試合のスタッフを用いて、試合ごとの気分の変化を調べ、競技パフォーマンスと心理的要因の関連性について明らかにすることを目的とした。

【方法】

早稲田大学男子バスケットボール部員19名を対象者とし、東京六大学リーグ戦とバスケットボール男子18歳以下日本代表チーム(U-18)との試合全4試合を対象に測定した。4試合のウォーミングアップ前にPOMS

(Profile Of Mood State)を記入させ心理状態を測定した。パフォーマンス評価を数値から導き出す個人の活躍(貢献度)と、数値に表れない個人の活躍(プラスマイナス)の2種類の方法で評価した。各選手の各試合のパフォーマンス評価の結果(貢献度、プラスマイナス)と試合前に記入したPOMSの各項目のT得点との関係については、Pearsonの積率相関係数を算出し、有意性の検定を行った。その後二時解析として、それぞれの項目とパフォーマンス評価の結果との独立した関係を検討するため、重回帰分析を行い、有意性の検定を行った。

【結果】

パフォーマンス(1分間あたりの貢献度とプラスマイナス)とPOMSの各項目のT得点との関係について、Pearsonの積率相関係数を算出し、有意性検定を行い、どちらにおいても有意な関係は認められなかった。次に重回帰分析を行い、1分間あたりの貢献度とPOMSの各項目の中で有意差を認められたのは活気のみであった。1分間あたりのプラスマイナスとPOMSの各項目の中で有意差は認められたのは、不安のみであった。

【考察】

Pearsonの積立相関係数の算出による有意性検定を行い、有意な関係が認められなかったのは、単変量解析では、独立変数と目的変数の間に交絡因子が存在していてもそれらを考慮した解析ができないためであると考えられた。重回帰

分析の結果、それぞれの評価方法から有意差が認められたのには、その評価方法の差異によるものであると考えられた。本研究では、心理的要因がパフォーマンスの発揮に有意に関係していることが示唆された。